



^ 13
3292
3





門 八 13
3292
3

村越傳託實錄卷之六

二好松永為征伐信長上洛之支

淺香文庫

卷之六

本大學出版部

長利十三代京師將軍義輝公二好善最与松永

洋心洋心裁裁れ終終の洛中静静をを次次に信長細川

光繁浦浦多多合合義輝の末乃多義能能とと取取之送送

誠誠と征伐征伐一長利家再貞貞と云云所所心緒心緒成

激激一一乃乃は義能能とと八八出出家家々々々々南都東大寺南都東大寺

ふふ一一乃乃と細川細川三三教教力力浦浦才才とと一一還還洛洛也

其外



抄撰傳記卷之六

一和拉水而後成作最上事之

臣打平次大納言御平次大納言

御平次大納言御平次大納言

御平次大納言御平次大納言

御平次大納言御平次大納言

御平次大納言御平次大納言

御平次大納言御平次大納言

御平次大納言御平次大納言

義能公遺稿

義能

河津義能と云
九代公の御孫

義明

河津義明の子と云ふ
河津義明の子と云ふ
河津義明の子と云ふ

元氏

河津元氏の子と云ふ
河津元氏の子と云ふ

義能

河津門と云ふ
河津東大寺の御孫

傳曰信長義能公と云ふは信長公と云ふは

那之の者の威をうけ天下平治し後水忠成

抑く將軍職所掌人と傳ふる後義能公小川

と云ふと云ふは河津十代公の御孫と云ふ

断絶ス

別し義能乃河津義能と云ふは河津河津入

三好退治と云ふは河津の武士と云ふは河津

河津忠成の御孫と云ふは河津河津河津

河津河津河津河津河津河津河津河津

義經二巻五

義代

自目八代

義代

空

天武

聖武天皇

天武

聖武天皇

義代は皇代祖皇と云ふ事は其代は是なりと云ふ故
 於て皇代祖皇と云ふ事は其代は是なりと云ふ故
 一押く御事御代は是なりと云ふ事は其代は是なりと云ふ故
 一押く御事御代は是なりと云ふ事は其代は是なりと云ふ故
 一押く御事御代は是なりと云ふ事は其代は是なりと云ふ故
 一押く御事御代は是なりと云ふ事は其代は是なりと云ふ故

引く義代は皇代祖皇と云ふ事は其代は是なりと云ふ故
 一押く御事御代は是なりと云ふ事は其代は是なりと云ふ故
 一押く御事御代は是なりと云ふ事は其代は是なりと云ふ故
 一押く御事御代は是なりと云ふ事は其代は是なりと云ふ故
 一押く御事御代は是なりと云ふ事は其代は是なりと云ふ故
 一押く御事御代は是なりと云ふ事は其代は是なりと云ふ故

大敵可也一はと徳川家(後)の代は徳川家
此言し私願分ハ武田の大敵の惣ホえハ得て空國
那成私名代と一一族の心は平劫に而信一と
可遣と此言ふとく劫に而ハ八百余人ハ流遣

得曰世世ハ勝以自分ハ初在成之既ハ
其度の一戦是利味の合戦ラれ月陳前ハ
是利の勝之也一次に徳田乃平ラる人ハ出
為りハ此名代と云ふハの家名ハ此名代
此を討りハ此名代ハ此名代ハ此名代

此名代の家名ハ此名代ハ此名代ハ此名代

徳田信長之次の子ハ此名代ハ此名代ハ此名代
之系と信長ハ此名代ハ此名代ハ此名代
六角頼重ハ此名代ハ此名代ハ此名代
近江路を切塞ハ此名代ハ此名代ハ此名代
此名代ハ此名代ハ此名代ハ此名代

信長ハ此名代ハ此名代ハ此名代ハ此名代
徳田信長ハ此名代ハ此名代ハ此名代ハ此名代

大流りもはらば川の流儀は凡そ依て
此の流るる言の人の流の流るる言の
此の流るる言の人の流の流るる言の
此の流るる言の人の流の流るる言の

此の流るる言の人の流の流るる言の
此の流るる言の人の流の流るる言の
此の流るる言の人の流の流るる言の
此の流るる言の人の流の流るる言の

此の流るる言の人の流の流るる言の
此の流るる言の人の流の流るる言の
此の流るる言の人の流の流るる言の
此の流るる言の人の流の流るる言の

此の流るる言の人の流の流るる言の
此の流るる言の人の流の流るる言の

是亦と再息しぬい天下不倍ととる敬し威
勢百倍也預くは倍実のゆりは信長此
子孫永代不倍之を不倍れ

大樹守合戦可い事

大樹守合戦可い事

永禄年中武田晴信入道信玄山條原と系列
川成信玄合戦後月代流りぬと末精原行中
とりて信玄後列し人殺山條原信昌系
始とて不倍信玄不倍と系列と記す

信玄の著し徳川家原と河ととる入く一
小部と過寒にぬり山と系列と入きん
とるく系列と列ぬりぬり山と系列と
急し系列と列ぬりぬり山と系列と
新し系列と列ぬりぬり山と系列と
列の列ととるぬりぬり山と系列と
考へ系列と列ぬりぬり山と系列と
信玄の著し徳川家原と河ととる入く一
小部と過寒にぬり山と系列と入きん
とるく系列と列ぬりぬり山と系列と
急し系列と列ぬりぬり山と系列と
新し系列と列ぬりぬり山と系列と
列の列ととるぬりぬり山と系列と
考へ系列と列ぬりぬり山と系列と

新田城より出馬して甲列路代進佛んとして之を二
五の路と云くは出馬して定かひある事一太極受
常凡の路も此是見ゆと云ふハ甲列路代路法して
中一山を云くは二式かとも指利有る事大樹子
法気と多峰と云ふのは法は一四ノ名指を
根城として歌要書を神念凡柳一云くは法宛
と云くは法一歌小田と送下もを列のたつと
邊列甲列のらく小は名と役を稱送送のたつと
之を云ふ一甲列路代送下は月去程のた

法向く事是令く不裁して情の色歌律方裁
の法は今法と法の大受と一云ハげりては
一と云れば唯の由効亦にお急一と云れは是
に定くはる。

傳曰く法と法のを又軍法の宗初と
一と比法陽万物の極意是に備るは

一才一歌味方のま指の知

歌陸(五)を云く歌と指の
有は歌のるくを云

一才二款のまねの行を智

款のなまねとまねと智
一口まねとまねとまねと智
まねのまねとまねと智

一才三款のまねの行を智

まねのまねはまねのまねのまね
まねのまねのまねのまねのまね
まねのまねのまねのまねのまね
まねのまねのまねのまねのまね
まねのまねのまねのまねのまね
まねのまねのまねのまねのまね

一才に款方後法有るを智

後法有る人財の行を智
まねのまねのまねのまねのまね
まねのまねのまねのまねのまね
まねのまねのまねのまねのまね

一才八款守るを智

守るを智
まねのまねのまねのまねのまね
まねのまねのまねのまねのまね
まねのまねのまねのまねのまね

一才一地の利を智

地一才と地一才の利を智
まねのまねのまねのまねのまね
まねのまねのまねのまねのまね

一才二人将の居を智

二人将の居を智
まねのまねのまねのまねのまね
まねのまねのまねのまねのまね
まねのまねのまねのまねのまね

一才之水の火責を智

水の水の火責を智
まねのまねのまねのまねのまね
まねのまねのまねのまねのまね

一、第一編の概観

本書は、我が国の歴史を、その政治、経済、文化の各方面から、系統的に考察し、その発展の過程を明らかにすることを目的として編纂されたものである。

二、第二編の概観

本編は、我が国の政治史を、その変遷の過程を、その政治制度、政治思想、政治行動の各方面から、系統的に考察し、その発展の過程を明らかにすることを目的として編纂されたものである。

三、第三編の概観

本編は、我が国の経済史を、その変遷の過程を、その経済制度、経済思想、経済行動の各方面から、系統的に考察し、その発展の過程を明らかにすることを目的として編纂されたものである。

四、第四編の概観

本編は、我が国の文化史を、その変遷の過程を、その文化制度、文化思想、文化行動の各方面から、系統的に考察し、その発展の過程を明らかにすることを目的として編纂されたものである。

五、第五編の概観

本編は、我が国の社会史を、その変遷の過程を、その社会制度、社会思想、社会行動の各方面から、系統的に考察し、その発展の過程を明らかにすることを目的として編纂されたものである。

六、第六編の概観

本編は、我が国の国際関係史を、その変遷の過程を、その国際制度、国際思想、国際行動の各方面から、系統的に考察し、その発展の過程を明らかにすることを目的として編纂されたものである。

七、第七編の概観

本編は、我が国の近現代史を、その変遷の過程を、その政治、経済、文化の各方面から、系統的に考察し、その発展の過程を明らかにすることを目的として編纂されたものである。

竹中へ申れりて訪りて一々公口致し置たり
甲州藩列公之指運送了の道と云款をて信言言
認の由も亦く討陣とは云松かくるも大勝の有り
報もさると大おのりて有たり此一止疎を以て
人及と悉く引りてひく川は川が少く機を為と
云二致ゆれ中ら致めゆた一其大思をて方
原より留候故石神一利持り
一向門迄取合事

長月村長志郎(中)申す文

初〜之公承承云云言〜用心のお清河を以て
母列母武田のはる場二云云に岩と築着款急
押寄切く然れ世はやく中し防を止る代わらぬ
着千弁を以て修り日致言〜は若く致ゆ〜馬路地の
者長村申す〜長原を以ての是と云く〜物かぬ〜衣
の衣おき〜衣を振高〜の此致故細く益〜ゆ〜
由原年の秘社仙閑命居を以て秋傳と云松信年
の衣〜長原を以て玉中の衣振と云〜酒造り
之衣〜列の計信正信寺の秘社寺の云云の如く

酒井の御使を公に遣はし申す

米倉高直の御用金に申す御使申上り申す
寺に於て百石の御使を申上り申す
御使及御給へ候之候に申上り申す
のり知つ候如候に申上り申す
寺に於て百石の御使を申上り申す
御使及御給へ候之候に申上り申す
のり知つ候如候に申上り申す
寺に於て百石の御使を申上り申す

酒井の御使

酒井の御使

新く正徳寺に御使を遣はし申す
御使及御給へ候之候に申上り申す
のり知つ候如候に申上り申す
寺に於て百石の御使を申上り申す
御使及御給へ候之候に申上り申す
のり知つ候如候に申上り申す
寺に於て百石の御使を申上り申す
御使及御給へ候之候に申上り申す
のり知つ候如候に申上り申す
寺に於て百石の御使を申上り申す

はとに午の村のつれに我れしとてさかるといふ人
押寄られたる害しはさしとて國を揚ぎ
去人し守中し國を揚ぎと静りゆく者さるれ
とるの士年小し知し門を押破りけり入る我れ
打く入る我れさるし門を破れさるしとて出れ
る我れさるしの者人路打りさるれをこぼれと
敵より知して人我れと門を破るとさるれは門を
と押寄るとつれにけり出れしと切とるる敵
彼是人我れと門是人我れとさるれは門を破

程と百性大徳とさるれは敵は敵とてさるれ
切とるる敵の人の我れに敵は敵とてさるれ
さるれし使とてさるれは敵は敵とてさるれ
我れとてさるれは敵は敵とてさるれ
味方我れに敵是人我れに返りてさるれは敵は敵
中さるれゆくとさるれは敵は敵とてさるれ
た益敵の如しとてさるれは敵は敵とてさるれ
返りては中さるれは敵は敵とてさるれは敵は敵
さるれは敵は敵とてさるれは敵は敵とてさるれ

宗の業のしく正徳寺の心持なり

三平の年 山中七重坊 西宮依也

大徳源義 海通中もあ 後夕仲

之中沙也 中多徳住の 大京在道三

世胤平人 杉村十重 菅田易書

菅原良成 二叔十重 足利三郎

在向く正徳寺の心持なり是も宗の奉り恨にても

る六代名れ九代名れと心持なり故に宗の宗なり

と心持なり宗の宗なりと心持なり宗の宗なり

押書ゆひの心持なり宗の宗なりと心持なり

平八郎生と心持なり宗の宗なりと心持なり

本宗の宗なりと心持なり宗の宗なりと心持なり

宗の宗なりと心持なり宗の宗なりと心持なり

宗の宗なりと心持なり宗の宗なりと心持なり

宗の宗なりと心持なり宗の宗なりと心持なり

宗の宗なりと心持なり宗の宗なりと心持なり

宗の宗なりと心持なり宗の宗なりと心持なり

宗の宗なりと心持なり宗の宗なりと心持なり

その七のついでに書かれたことである。

長神と長子とをわけておけ かの一はか

人徳はふる 法政はよく 長子と長子

とてはわかれ 長子の徳を 長子に譲るべし

長子にふる 材材とよく 長子の徳を

長子に譲るべし 長子とよく 長子の徳を

長子の徳を譲るべし、長子とよく長子の徳を譲るべし、

長子の徳を譲るべし、長子とよく長子の徳を譲るべし、

長子の徳を譲るべし、長子とよく長子の徳を譲るべし、

伊予守のとき、あるとき、伊予守と長子とをわけておけ、

長子とよく長子の徳を譲るべし、長子とよく長子の徳を譲るべし、

長子の徳を譲るべし、長子とよく長子の徳を譲るべし、

長子の徳を譲るべし、長子とよく長子の徳を譲るべし、

長子の徳を譲るべし、長子とよく長子の徳を譲るべし、

長子の徳を譲るべし、長子とよく長子の徳を譲るべし、

長子の徳を譲るべし、長子とよく長子の徳を譲るべし、

長子の徳を譲るべし、長子とよく長子の徳を譲るべし、

長子の徳を譲るべし、長子とよく長子の徳を譲るべし、

東名年々く一居のあり忠と云ひし人々友あり
佛も下のおも海くくしゆくしと云ひし
和の名は揚力と云ひし其の厚忠と云ひし他
信友ん事来り申すし古流ゆし二君し仁
しと云ひし所し内さるる言し其をいふ事
い海を流しし海流し其れは信信す
久し海と流しし海をいふ信信す物見海の働
るし小玉の軍政司形見事決意ゆれば其
りし二君し其信ししと云ひし其救上の不苦し方

書ゆ添く三列しと云ひし其流川と云ひし其に
りしれりしれりし水外と云ひし其れは信信と云ひ
りし物と云ひし其れは信信と云ひし其れは信信と云ひ
家原云し送るし文曰

一 軍紀と信物と云ひし其れは信信と云ひし
らりし物ニヒリの軍法の流しと云ひし其れは信信と云ひし
軍紀し其れは信信と云ひし其れは信信と云ひし
軍制と云ひし其れは信信と云ひし其れは信信と云ひし
其れは信信と云ひし其れは信信と云ひし其れは信信と云ひし

進之仕の事蹟を尋ねての軍記に由は是故に神前
に於てある事なりと存するをこれに依りて

取原云、

上校謹信入道

初之世と云原山印然と雖も故に管長取不斜

山印然山軍司とて又万軍被不任也

初々家原云ハ山印常力、軍法を志と云云々其原

初八命大は實に其の与人とを列乾二段小印子人此

既計指係扣さるる不取回は先子印候を以て其の

有物と云をとりふ被末りるハ之列乾ハ信也人此

先子と云人々遠列乾二段色不備也之味方侍代

向のり一戦の御所と云先ハ其大御中御人御色

不取見ハ其の由成りて追辨下りり其水取

信言い仕せりし之列乾ハ是と云ふ事多し其

子の有りと押合く追的ハ其御色法に被り

ついでに自身難かしく其被り包ハ其後并軍列

の侍身甲列の先陣山印侍中元山梅吉出陣大御と

して其御合く其子御人一人として乾二段の

之列御ハ其二三之小計と云ふ之列乾ハ是と云

松素通人と標のしり業より方の男よくなふ
し法地さひしりしるを名と標打とりの信吉の
切陳之を為事しり色は赤赤流初しと子に似れ
之をりしし中幸力り却し一高小初とるを能言
急し業之を色は信吉の切陳之を流色影流
とれ取ら負流許多りし信吉と流くと二役
と通ふしり方のたし標利と流武向方の江島備
と流流しり法地とてとるは固く想われは武向
物世新しり流之止流流は流ししりとる流

山部かしり故のたしと必通流流いしりし
味方の流と金ありしり流と流流想流と
常力宗上しりしり流武向方多人の打流しり
石けしりしり流流流中武向と合流とるしり
今度常力の流し味方と流流流流流流流流
流しりしり流の流流流流流流流流流流流流
しり流流流流流流流流流流流流流流流流
流流流流流流流流流流流流流流流流流流
流流流流流流流流流流流流流流流流流流
流流流流流流流流流流流流流流流流流流

赤く染めしこゝろに下りて来りし人し不しといふ
命なりすとて決まらうと云ふ事ありしこゝろに下りしは
いふ事ありし人をもまたの事なりてありき事しは
血海のこのまことをもたれればははらりて
あやのせきもたれればははらりて
とて一もたれればははらりて
とて一もたれればははらりて

情口ももたれればははらりて
とて一もたれればははらりて

いふことありしこゝろに下りし人し

情口ももたれればははらりて

いふ事ありしこゝろに下りて来りし人し不しといふ
命なりすとて決まらうと云ふ事ありしこゝろに下りしは
いふ事ありし人をもまたの事なりてありき事しは
血海のこのまことをもたれればははらりて
あやのせきもたれればははらりて
とて一もたれればははらりて
とて一もたれればははらりて

京大坂奥羽合戦之事

上校家紋新し文

爰小藏田信長云々乃年及雅云西國ハ所去のト一
守られし年大不悦ひ乃ハ内と外結めハ
將軍職ハ亦も其の向に改行すれしと感
目く月く増え一を云は改行するとのう
乃新物と云法國ハ其外物結し其先と後信信ハ其
信主と川中結し合戦及とくとも未と云之の

爰小藏田信長云々乃年及雅云西國ハ所去のト一
守られし年大不悦ひ乃ハ内と外結めハ
將軍職ハ亦も其の向に改行すれしと感
目く月く増え一を云は改行するとのう
乃新物と云法國ハ其外物結し其先と後信信ハ其
信主と川中結し合戦及とくとも未と云之の
爰小藏田信長云々乃年及雅云西國ハ所去のト一
守られし年大不悦ひ乃ハ内と外結めハ
將軍職ハ亦も其の向に改行すれしと感
目く月く増え一を云は改行するとのう
乃新物と云法國ハ其外物結し其先と後信信ハ其
信主と川中結し合戦及とくとも未と云之の

予れし信者不日難に果てたしとて揚州に
將軍從帝と乘者京師に由り向ふ文秀と名を白京
郡大坂所とて合戦をす之に敗れ何れも出づ可性
た才多れはもろく事事とて争く甲申相悟成
ていふ事終大坂平治とてれし相果の智を危列
凱陣とてしりし何果に六を討つ其後若名盛成
伊年輝宗教友合戦を名れぬ小終小若名之滅して
伊年輝宗奥列中に死す伊年一と威少年と輝宗
松ヶ谷の源八文治の氏秀何れ子孫形録のあり亡
り

三浦一守之浦七郎源村初とて名傳は頗る若名
改令名ありとて取而年合戦と頗る若名今年
伊年輝宗はわよとていふ若名は若名ありしは
り

河内曰伊年源氏の世に世名は種とて福とて
しと末に實記とて少くもいふ伊年源
山京中絶の末孫也故もて勅勅代名あり
伊年源を流やとて絶りて一氣に十三代
徳宗とて人の附れ絶る伊年源とあり

信安の御方の人宛

山崎の御方の人

山崎の御方の人

山崎の御方の人

山崎の御方の人

山崎の御方の人

山崎の御方の人

山崎の御方の人

山崎の御方の人

初く家康公の御方の人宛
人宛渡りし御方の人宛
少くも御方の人宛
公令く五百に人の人宛

山崎の御方の人宛
二千人二千人の御方の人宛
山崎の御方の人宛
山崎の御方の人宛
山崎の御方の人宛
山崎の御方の人宛
山崎の御方の人宛
山崎の御方の人宛
山崎の御方の人宛
山崎の御方の人宛

武田信玄の御方の人宛

是と云ふは... 後

△□○○

△

△

二□○○

二□○○

二□○○

二□○○

△

△

△

□

□

□

○

○

○

村越傳記実録巻之八

味方、原佐吉、近江、一戦、事

高井、武切、復、目、名、死、之、事

新、武、田、佐、吉、程、川、一、戦、以、揚、為、名、遂、以、侯

一、之、手、修、不、為、並、為、事、余、一、は、情、次、身、之、併

味、方、比、者、元、心、入、と、部、中、也、ら、れ、は、味、方、の、陣、に

思、ひ、と、ま、を、を、程、子、と、西、方、に、成、為、所、よ、り、ま、り、あ

合、中、者、は、侯、主、の、引、方、か、ふ、と、味、方、の、ま、り、よ、り

又、名、事、之、と、高、井、武、切、小、と、西、方、取、以、成、為、所、を、名、也、り

此の書は、*Handwritten text*

Handwritten text

Handwritten text

Handwritten text

Handwritten text

Handwritten text

Handwritten text

Handwritten text

Handwritten text

此の書は、*Handwritten text*

Handwritten text

Handwritten text

Handwritten text

Handwritten text

Handwritten text

Handwritten text

Handwritten text

Handwritten text

武田に降門退りし時一討くを名に信を名に
是を名に〜 使者に馳くは千石の石を名に地
石を名に地之可少く方は治りて名に地
退りし時一討くは治りて名に地
知るは名に地を名に地を名に地を名に地
怨と山嶽と武田に降門退りし時一討くは治りて名に地
し名に地を名に地を名に地を名に地を名に地
武田に降門退りし時一討くは治りて名に地
の地を名に地を名に地を名に地を名に地

防りし人殺さる〜 一討くは治りて名に地
怨を名に地を名に地を名に地を名に地
おとす〜 一討くは治りて名に地
は名に地を名に地を名に地を名に地
に名に地を名に地を名に地を名に地
を名に地を名に地を名に地を名に地
おとす〜 一討くは治りて名に地
を名に地を名に地を名に地を名に地
〜 一討くは治りて名に地
〜 一討くは治りて名に地

事の終り必門と少少移り門を門内外毎大
経く積り一と命をらるる後空腹に也内湯
漬飯丈丈と云ふと小忌をもとの経とて内甲と花
いら経の積り加し誠中丈丈夫の凡多るんぢり
近首の巻と終り此の物り如く是を遠より
して馬橋内友山縁の子好後と何事事山縁
の物と云ふ物移り門と門と又も只毎丈と積大
く扱ふればはら積丈法と云ふと云く是必傳中
に係る一と是を月八向のね糸小引返く扱
ゆと得設縁の物と云く是をと一と云はれ
し山縁内友と是中向の物

傳曰く馬橋山縁山甲動めり山縁少く軍法
と傳く云く故傳所説ふ家屋云い毎
火の巻汁を後めい毎丈とて款は法と
集り一毎小氏と云く又由傳よりハ毎丈と
云ふの由是うれと云く云々

家屋云子別る高井美た此新井日向吉よ山子人
馬橋野縁は後村と傳りる法自方少く

中橋中世とてふ目とて取を觀て少く大なる階級能
くふら備山孫川及不也言支(中)中言并
急了道者多事凡七接業級和知山孫く
打後飽言并くむさあゆ(中)中くはれは忽あ
る(中)く家人くも女抱く(中)中平は川は名取
是か(中)別階高川(中)と道高(中)名并く物と後
く不(中)言(中)の(中)方(中)く(中)も(中)や(中)あ(中)ら(中)さ(中)ら(中)け(中)重(中)様(中)の
深(中)中(中)と(中)え(中)た(中)ら(中)し(中)し(中)山(中)を(中)尋(中)さ(中)せ(中)あ(中)ら(中)る(中)言(中)并(中)く(中)
り(中)心(中)の(中)や(中)浅(中)女(中)取(中)中(中)痛(中)い(中)女(中)言(中)け(中)物(中)取(中)を(中)は(中)ら(中)る

山孫く(中)打後飽(中)故(中)ら(中)と(中)く(中)ら(中)く(中)ま(中)く(中)又(中)打(中)後
下(中)り(中)人(中)怨(中)と(中)さ(中)ら(中)る(中)物(中)く(中)ら(中)る(中)れ(中)は(中)言(中)す(中)
言(中)并(中)く(中)或(中)切(中)を(中)感(中)し(中)ら(中)る(中)物(中)く(中)ら(中)る(中)は(中)後(中)に(中)勝(中)力
又(中)く(中)幸(中)方(中)を(中)為(中)す(中)交(中)減(中)印(中)加(中)階(中)の(中)者(中)大(中)新(中)井(中)中
板(中)子(中)起(中)ら(中)る(中)如(中)智(中)光(中)秀(中)中(中)名(中)ハ(中)是(中)後(中)に(中)勝(中)力(中)前(中)を(中)る
新(中)に(中)抑(中)裁(中)ら(中)る(中)信(中)主(中)の(中)人(中)軍(中)抑(中)者(中)と(中)し(中)と(中)に
罪(中)を(中)な(中)す(中)一(中)候(中)令(中)徳(中)川(中)階(中)急(中)了(中)の(中)め(中)ら(中)る(中)
亦(中)厚(中)云(中)の(中)法(中)身(中)に(中)恙(中)ら(中)る(中)起(中)く(中)一(中)候(中)相(中)の(中)行(中)は(中)女
ら(中)く(中)事(中)進(中)後(中)生(中)ら(中)る(中)事(中)下(中)り(中)也(中)と(中)所(中)ハ(中)八(中)子(中)の(中)階(中)

久保田清海の叔父藏所射書

初は書信玄八味方原一人と云ふに区書所
信と云ふは渡板の抄書と用正して抄る
實小太の清海と云ふ書人と云ふ一書所書の
衆の中より其の書向方三の條を取陳はるる
清海文と云ふは書了り後絶てたてて三三と
切くをる書向方三の條より其の書向方の
書と云ふ清海と云ふは書了り後絶てたてて三三と
了り後絶てたてて三三と

叔父の書信玄八味方原一人と云ふに区書所
信と云ふは渡板の抄書と用正して抄る
實小太の清海と云ふ書人と云ふ一書所書の
衆の中より其の書向方三の條を取陳はるる
清海文と云ふは書了り後絶てたてて三三と
切くをる書向方三の條より其の書向方の
書と云ふ清海と云ふは書了り後絶てたてて三三と
了り後絶てたてて三三と

五のつらき事一は、
徳也とす、
徳九

一 五のつらき事一は、
徳也とす、
徳九

一 五のつらき事一は、
徳也とす、
徳九

一 五のつらき事一は、
徳也とす、
徳九

一 五のつらき事一は、
徳也とす、
徳九

一 五のつらき事一は、
徳也とす、
徳九

一 五のつらき事一は、
徳也とす、
徳九

徳也とす、
徳九

徳也とす、
徳九

徳也とす、
徳九

徳也とす、
徳九

徳也とす、
徳九

徳也とす、
徳九

徳也とす、
徳九

徳也とす、
徳九

徳也とす、
徳九

有之進お徳をーり信玄の無き中々

新修城の方々も水智城の空海あり

徳軍を不度中事人へ一命不可有は後

御も治育の如く海に望

二月廿二日

武田信玄

松平と菅部也

菅沼大膳也

お新中あり水へお人へも信の城号下為し来凡
お人へも水へ一人は是城とてお方々の意成を

おし治の二組切おの烈と不礼城出する毛凡
兼忽れ成不て有とりくと城作の令限成金り
心を捕とるく信と中身菅沼大膳松平と菅部
お人へも中今へは是城とてお牛之保とて市之趣
の如くお後飽の多類く歩山孫之節之場二子
人の防と率一打てるとるお人信亦中防るれハ
徳軍とお一戦相とるく家くけ新と令印情
しよあては城を救多の者丸の命之定元来意と
お人令を捨多くは城を代物とてお心極とて

三河の諸軍は先期より長篠の陣に
勝れ長篠の陣に勝れ一國平と一戦せんといふ
馬場曰く長篠の陣は古の信玄といふ由死
源軍の時より何れに由軍を以ては是れ由軍を
お返し信り徳川のときこそ是れは物々事
々ありし一討め信玄といふ由軍といふ年の由
他國の御事一軍といふ由軍を以ては是れ由軍の
長篠合戦の由軍といふ由軍の中古の信玄長篠
の由軍は信玄といふ由軍は他國の御事といふ

信玄は長篠の陣に勝れ一國平と一戦せんといふ
馬場曰く長篠の陣は古の信玄といふ由死
源軍の時より何れに由軍を以ては是れ由軍を
お返し信り徳川のときこそ是れは物々事
々ありし一討め信玄といふ由軍といふ年の由
他國の御事一軍といふ由軍を以ては是れ由軍の
長篠合戦の由軍といふ由軍の中古の信玄長篠
の由軍は信玄といふ由軍は他國の御事といふ

し長篠の陣に勝れ一國平と一戦せんといふ
馬場曰く長篠の陣は古の信玄といふ由死
源軍の時より何れに由軍を以ては是れ由軍を
お返し信り徳川のときこそ是れは物々事
々ありし一討め信玄といふ由軍といふ年の由
他國の御事一軍といふ由軍を以ては是れ由軍の
長篠合戦の由軍といふ由軍の中古の信玄長篠
の由軍は信玄といふ由軍は他國の御事といふ

城後後といふ事と海軍... 寄方集録... 寄方

この方又別の城と望国とされしやたふ方いふ言

う月多井八丈と名條に之終北邊に火と焚

行人といたる事と甲別方の者大怪しむが事

捕持れり前引て持れり海に汝の者

成りといは信り新... 東に名條の城を奥平屋代

の屋代名井路... 事有らるる言はれは何れ

智徳といわれり多井やれば城を後後進引

の訳を後後といふ事... 近し家原位と後後

事との後... 事と城といふ事

火と焚といふ事... 捕持れり

おこりし海の下... 感入りて

白切は海来... 補ゆと汝

多井といふ... 何れは

新... 汝は

私合有る... 何れは

事... 何れは

事... 何れは

事... 何れは

事... 何れは

城守にふたの遊女を遣はす
是れは、子母ありと書きて、
先條を降進するも、
中へ心は、
はらば城守の者へ、
の端し、
は、
人をも、
名井と、
仕業うねと、
吾等、
人をも、



